

「性被害」を打ち明けられたなら
～支援者が言っはいけないこと、伝えて欲しいこと

東部児童相談所・心理支援班 川代浩子
東部相談所気仙沼支所・家庭支援班 山口朋花

キーワード：子どもへの性被害・グルーミング・否認

I 目的

家族から受ける「子どもへの性被害」の影響は深刻で、トラウマ・後遺症は数十年にも亘って続き、心と体を蝕み続ける。早期に発見し安全を確保することが大事だが、発見に至るためには、子どもに関わる支援者の方々の「子どもへの性被害」に対する正しい理解・協力が必要である。

今回の発表では、児童が表出した性被害のサインの受け取り方、声がけの仕方を支援者と共有することで、子どもが性被害について打ち明けることができ、早期に支援に繋がるようになることを目的とする。

II 方法

(1)対象

東部児童相談所で関わった、家庭内で性被害を受けた児童（女児7名）

(2)調査方法

面接記録からの抜粋

(3)調査期間

令和4年4月から令和8年1月まで

(4)調査内容

各事例から初回被害時期、打ち明け時期、加害者、家族状況等9要因を抽出したほか、児童の発言も抜粋。

(5)倫理的配慮

要因別に抽出し、個人が特定できないよう配慮を行った。

(6)分析方法

本研究では、7事例に含まれる要因を9項目に分類し、各項目について該当人数・件数を集計し棒グラフを用いて視覚的に整理した。その項目毎の特徴・傾向の分析に、7事例の児童の発言抜粋を加え、全体としての傾向や示唆を導き出した。

III 結果

子どもは、された行為が性被害であるという事実認識に至るまでに時間・成長を要する。事実認識後も、告知により家族関係の維持が困難になることが予想できること、周囲が事実と信じてくれるかどうかといった不安、罪悪感・自責感等の心理的要因等により、打ち明けまでも時間を経る。だが、児童の発言からは、周りの大人が児童の話を真摯に聞く姿勢を持っていたり、あるいは児童の出すサインに敏感に気づいて声がけしたりすることで、打ち明けに至るようになることが確認できた。

IV 考察

支援者の初期対応が、子どもの語りを促すか否かに大きく関与しており、子どもの言葉を否定せず、安心して話せる環境を整えることの重要性が再確認された。今後は、支援者が性被害のサインに気づき、子どもの声を丁寧に受け止める姿勢を持つことが、早期発見と適切な支援につながると考えられる。

V 参考文献

朝日新聞取材班「ルポ 子どもへの性暴力」（第1版）．朝日新聞出版：2024